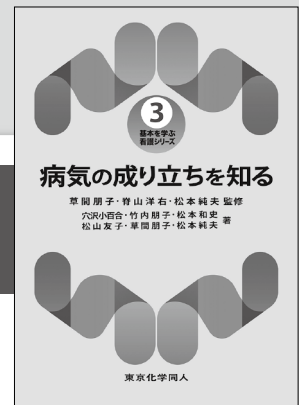


病気の成り立ちを知る (基本を学ぶ 看護シリーズ 3)

監修：草間朋子・脊山洋右・松本純夫 編集：草間朋子・松本純夫
執筆：穴沢小百合・竹内朋子・松本和史・松山友子・草間朋子・松本純夫
B5判・312ページ
定価：本体3,100円＋税
発行：東京化学同人（03-3946-5311）



症状と病気について基礎から学ぶ 自己学習支援書

評者◎林直子 聖路加国際大学看護学部教授

本書は「基本を学ぶ看護シリーズ」の第3巻として刊行された。同シリーズは、看護職の主要な役割のひとつである症状マネジメントに必要な医学・生物学の基礎知識を、段階的、系統的に習得できるよう、監修者らにより構成されている。既刊の第2巻は、『からだの仕組みと働きを知る』というタイトルの解剖学、生理学のテキストであった。その際に感じた驚きを、今回本書で再び感じることができた。それは、“面白く、惹きつけられる”ということである。本書は看護系の講義科目でいうところの、病態学あるいは疾病学の概論テキストに該当するであろう。病態学、疾病学概論というと、一般的なイメージでは（誤解を恐れず言うなら）複雑・難解で、終講試験を思うと気持ちいが沈む科目、という位置づけかもしれない。そのテキストが面白い、とはどういうことか。

第一の特徴は、文章表現、図表、イラストに至るすべてにおいて、とてもわかりやすく記載されていることである。例えば「炎症」の項では、だれもが知る炎症という語の定義に始まり、炎症の各症状がなぜどのようにして生じるか、また炎症が発熱を伴う際の理由と機序が詳細に解説されている。これを知ることによって、看護学生は、炎症所見を有する患者を受け持つ際、患者の炎症反応にまつわる臨床症状を視診とデータで確認し、フィジカ

ルアセスメントの結果をケアにつなげることが可能となる。また発熱をきたしている場合は、炎症との関連や効果的な解熱方法とを結びつけて思考することができる。それにより患者の与薬内容とその効果予測を根拠に基づいて行ない、併せて与薬後の患者をどのようにアセスメントすべきかがわかるのである。

次に、やはり第2巻と同様の特徴であるが、ほぼ全ページに学生が疑問をもちそうな事項について、コラムとして解説が付されている。その内容も、腫瘍マーカー、門脈圧亢進症、マルファン症候群から平熱と筋肉量、がん終末期の食欲不振、介護職員の吸引、背抜きなど、検査や症候・症状、制度やケア用語など多岐にわたっている。コラムだけを抜粋して読み進めても、不足した知識をジグソーパズルのピースをはめていく作業のようで興味深い。

本シリーズは、“人”を理解する上で必要な知識を習得するテキストとしての一貫性をもつ。その中で本巻は、何らかの疾患を発症した人が呈する、正常な健康状態から逸脱した症候とその機序を理解し、アセスメントにつなげられることをめざした書である。基礎教育課程の学生のみならず、改めて知識を確認したい、確認すべき多くの人に必ず役立つ書である。